



嶺 鶴

令和7年9月1日
大田区南久が原 2-17-1
電話 (3750)2260
FAX (3750)2280

「学びに向かう力」再考 ～構えと学び～

大田区立東調布第三小学校

校長 並木 昭

横向きに寝ているアリというものを初めて見ました。

飼育している容器を傾けてみたところ、力が尽き果てたからでしょうか、その勾配に抗わず、するすると滑り落ちていくのです。どの脚も畳まれたままです。それでも触覚が微かに動きます。これは、ムネアカオオアリの女王アリです。

話は今年の5月に遡ります。とある研究会での懇談の折に、その日の講師の先生から、女王アリを譲りますので観察してみてくださいと勧められました。7月には働きアリの成虫が確認され、徐々に個体数が増えていきました。ところが、8月に出張や休暇のために校長室を留守にしていたところ、10匹いた働きアリは全て小さく縮まり、動かなくなっていました。与えた水が足りなかったのは明らかでした。久しぶりに観察した朝のことです。女王アリの顎に向けてシリンジから落とした数滴の水に望みを託しました。

次に確認したのは2日後。女王アリは容器内を歩いていました。嘘だろ、というのが率直な感想でした。触覚しか動かなくなった状態から、歩き回るまでに回復していたのです。たしかに、飼育の方法には不備がありました。しかし、観察から得た知見の尊さは否定できません。

偶発的な発見（セレンディピティ／serendipity）に至る過程は、他者の粗探しをするような思考の対極にあるものと言えます。「たまたま見付けた」という事実の背景には、その発見を引き寄せる原因、すなわち「構え」（観察における些細な変化などを逃さない心の在り方）があります。なぜなら、構えがなければ見過ごすからです。「たまたま見付けただけだろう」という批評に対しては慎重でありたいと考えます。むしろ、そのような意見に対し、徹して冷静でいられるような堅牢（ロバスト／robust）な意志や態度は、構えに内包されていると言えるでしょう。

構えは学びを呼び起こし、学びは構えを強めます。そのため、両者は補完的な関係にあります。観察と直感と熟考とが響き合うような知的空間を創造していきたい——。今、そのように考えています。